

蘇る天平の夢
興福寺中金堂
再建まで。
25年の歩み

多川俊映

集英社
インターナショナル

蘇る天平の夢 興福寺中金堂再建まで。25年の歩み

目次

はじめに

6

第一章 境内整備と中金堂再建を志すまで

コラム① 興福寺を去った仏像・残った仏像

37

第二章 ついに動き出した「天平の文化空間の再構成」

コラム② 薪御能と塔影能

58

第三章 発掘調査と中金堂再建のプロセス

写真で見える中金堂再建のプロセス

61

第四章 新たななる礼拝対象「平成の法相柱」再興

コラム③ 法相唯識の「阿頼邪識」

95

87

81

第五章 木材と瓦、職人たちの力を結集

その一 柱になる木材を調達する

その二 目指すは一〇〇〇年もつ瓦

興福寺の至宝 仏像との新たな出会いのために

興福寺略年表

はじめに

興福寺伽藍がらんの中核施設・中金堂ちゆうこんどう——。その本来の規模と様式を備えたお堂は、三〇〇年もの間ありませんでした。

一八世紀初頭の享保二年（一七二七）一月の大火で、興福寺は境内の中心から西半分を焼失。そのとき、応永六年（一三九九）に再建さいこんされた中金堂も焼亡し、それ以来、中金堂再建は苦難の道を強いられました。

むろん、即座に復興計画が立てられました。しかし、時の利を得ず、ついに天平規模の再建は見送られ、約一〇〇年後の文政二年（一八一九）になって、規模を縮小した仮設堂宇たせうどううがようやく造立されました。これをともかくも「中金堂」と称したのですが、創建規模の重厚な殿閣造りとはほど遠いものでした。なお、この文政仮堂は新築ですから鮮やかな丹色にいろに仕上げられましたの

で、その後、「赤堂」^{あかどう}の名で親しまれました。が、この名称には、どこか賤^{せん}称^{しょう}の趣があります。創建規模の重厚な殿閣造りをイメージすれば、それも仕方のないことかもしれません。

この文政仮設の中金堂はその後、明治・大正・昭和と長期にわたり、ともかく興福寺の中核施設としての役割を果たしてきたのですが、昭和四〇年代に入ると急激に老朽化し、須弥壇上^{しゆみだん}のご本尊をはじめとするご仏像にも影響が出始めました。そうした折、同宗の薬師寺さんの旧金堂が解体されたのを譲り受けて、昭和四九年（一九七四）、その用材で講堂跡に昭和の仮金堂（現・仮講堂）が建設されました。

さて、平成になり、元年（一九八九）九月に筆者は興福寺貫首^{かんす}に就任しました。就任して先ず最初に行ないましたのは、境内をさまざまな角度から改めて眺めてみることでした。そして、そこにあった境内は、公園的形狀が勝ちすぎた。景観で、また、樹木が密植され境内の見通しも悪く、雑然としたものでした。

一方、日本建築史が明らかにした奈良時代の興福寺伽藍復原図は、実に整然としたものでした。この大きな落差を少しでも縮めることができたなら、というのがそのときの正直な気持ちでした。それに、興福寺は和銅三年（七一〇）の創建ですから、平成二二年（二〇一〇）は「創建一三〇〇年」です。

これは、境内の史跡整備（基壇表示）とその眼目の中金堂の天平規模と様式による再建のまさに好機、それを逃してはいけない、という思いを強くしました。そこで、平成二年（一九九〇）に中金堂再建について親しい瀧川昭雄棟梁と相談を開始し、また、平成三年（一九九一）には、元・奈良国立文化財研究所長の鈴木嘉吉先生をはじめ、各分野の学識経験者のご参画を得て、興福寺境内整備委員会を発足。興福寺境内の問題点を整理していただき、その上で、史跡整備について基本構想を策定していただきました。

また、当山としても、創建一三〇〇年に当たる平成二二年（二〇一〇）を中心にその前後各一〇年、つまり二〇年間を「創建一三〇〇年記念事業期間」と位置付け、史跡整備を進めると同時に、懸案の中金堂再建事業に微力を傾注することにしました。本書はそのあらましで、また、木工事の瀧川昭雄さ

んと瓦の製作と葺き工事の山本清一さんの、現場としてのお話も収録させていただきます。

関係各位のご指導、また、多くの皆さま方のご協力・ご参加という尊いご縁の下、興福寺中金堂は本年一〇月七日ついに再建成り、落慶いたしました。折にふれ、再建された中金堂の雄姿の下、天平の昔に想いを馳^はせていただければ、うれしく思います。

平成三〇年一〇月一日（中金堂落慶 結願の日）

興福寺貫首 多川俊映

カバー／表紙 興福寺中金堂(写真 飛鳥園)
ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

第一章

境内整備と中金堂再建を志すまで

貫首になり、境内を眺めてみれば……

平成元年（一九八九）九月一日、私は興福寺貫首に就任しました。四二歳のことでした。特に秀でた才能をもっていたわけでもなく、貫首就任はひとえに山内事情によるものでしたが、しかしいずれにせよ、南都の大寺だいじとしては異例の、若い貫首が誕生したといわれました。

就任後、親しい寺社へご挨拶に伺いますと、「あなた、大変やでえ」とおどかされたり、「大丈夫や、やれる。がんばり」と激励されたり。反応がもの見事に二分すること、我ながら「おもしろいなあ」と感じました。

どうしてこんなに違うのだろうか？

そこで、よくよく考えてみますと、「大変やでえ」のほうは、おおむねそれ相応の年齢で一寺の代表者に就かれたお人の物言い、その経験からすれば、至らぬ若造にはさぞかし荷が重かろう……と思われたのだと気づきました。

一方、「大丈夫や、やれる」と声をかけてくださった長老さんや管主かんすさんは、実は皆、

私と同じ四〇代前半で一山いつさんの代表者になった人たちでした。ご自分の経験をもとに激励して下さったわけで、今思い返してみても、つくづく心強く、有難いことでした。

貫首に就任した当時、私は改めて当山境内をさまざまな角度から眺めてみました。

そこにあったのは、明治以来の、あまりにも公園的形狀が勝ちすぎた姿でした。ほとんど無秩序に樹木が密植された境内は、あたかも暗く鬱蒼うつそうとした森のような様相で、その中に堂塔が散在し、生い茂る枝や緑の間から五重塔の上部や東金堂とうこんどうの薨いらかがちらちらと垣間見えるといった状況でした。

また、創建以来、常に興福寺の信仰の中核施設であった「中金堂」は老朽化の一途をたどり、無残な姿をさらしていました。朽ちて垂れ下がってきた軒をつっかえ棒で支え、天井のあちらこちらから雨漏りがする……。一時は仏像の上にテントを張ってしのいでいましたが、これでは法要もままならないと、私の父親である先々代の貫首・多川乗俊（一九五四―八四在職）が、昭和四九年（一九七四）に中金堂北の講堂跡地に「仮金堂」を建て、ご本尊などを移安していました。私が貫首に就任した当時の中金堂は、朽ちた建物が残るのみで、その内部はほぼ空っぽの状態だったのです。

あるとき、こんなことがありました。私が五重塔の近くを歩いておりましたら、観光客とおぼしきお人が、「ここは興福寺ですよね？」と尋ねられます。「そうですね」とお答えすると、今度は西のほうにある南円堂なんえんどうを指して、「あそこはどこのお寺ですか？」とおっしゃられる。せっかく遠方から参拝に来ていただいても、興福寺の信仰の中核施設も判然とせず、境内の全体像を把握していただくこともできない……。申し訳なさと同時に、口惜しい思いがこみ上げたことは言うまでもありません。

当山は、創建一三〇〇年の歴史を誇ります。奈良時代の伽藍復原図を参照すれば、その伽藍は整然と結構されており、また創建当初は日本最大の寺院建築物であったと伝わる中金堂の壮麗な雄姿がしのべれます。

それに比べて、眼前に広がる境内の有様はなんたることか。このすさまじいばかりの落差はいったい何なのか——。正直、そのような思いを抱いておりました。

そうこうしているうちに、境内整備と中金堂再建という喫緊きつぎんの仮題が自らの中に浮かび上がってきました。参拝に來られた皆さんに、天平時代に創建された興福寺のイメージを持って帰っていただきたい。そのためにも、藤原不比等ふじわらのふひとが天平の仏教文化

を切り拓き、常に当山の中心として機能してきた中金堂を復原したい——。その思いは日に日に大きくなっていきました。

平城京を見下ろす立地の興福寺

法相宗大本山として知られる興福寺の起源は、天智天皇から藤原の姓を賜った藤原（中臣）鎌足が開いた「山科寺（山階寺）」にあります。

鎌足は、大化の改新のときに中大兄皇子（のちの天智天皇）を支え、蘇我入鹿を打倒した人物として有名ですが、その決起が成功することを祈って、釈迦三尊像と四天王像を発願しました。天智八年（六六九）、鎌足が重い病を患うと、夫人の鏡女王が病氣平癒を祈願して、これらの諸像を安置するために山科（現在の京都市山科区）に寺を造営することを勧めたと伝えられています。これが当山の発端で、この山階寺の名前は後世においても興福寺の別称として使われています。

その後、壬申の乱（六七二年）を経て都が飛鳥地方に戻った際に山階寺も移建され、その地名を取って「厩坂寺」と称されました。

そして和銅三年（七一〇）の平城遷都に伴い、遷都を実質的に主導した藤原不比等によって新都に遷うつされ、「興福寺」と名づけられました。以来、一三〇〇年もの長きにわたり、法灯を守り続けています。

不比等は鎌足の二番目の息子ですが、一一歳のときに父を亡くし、後ろ盾を失って下級官人から立身した努力の人で、七世紀末になって朝廷の中枢に進出し、絶大な権力を握るようになります。また、不比等の妻・賀茂比売かものひめが産んだ娘、宮子は文武天皇夫人となつてのちの聖武天皇しやうむを産み、もうひとりの妻・橘たちばなの三千代との間には、聖武天皇の妃となる光明子こうみょうし（光明皇后）が誕生します。興福寺は藤原氏の氏寺うじでらとしてだけでなく、このように皇室とも深い結びつきを得て、隆盛を極めていきます。

興福寺は、平城京の東端に東西南北各四坪（古代の一坪＝約一〇九メートル四方の正方形）という広大な境内地と、さらに南西側には菜園や苑池（現在の猿沢池さるさわのいけ）などを有し、その敷地は全部で二四坪（約二六一六平方メートル）にも上りました。

また、立地もたいへんに優れておりました。興福寺は、神々が宿るとされる春日山系の麓に広がるなだらかな丘陵地の先端部分に位置しています。興福寺から西を見れば

ば、「咲く花の 薫ふがごとく 今盛りなり」と『万葉集』に謳うたわれた平城京の中心部を見渡すことができ、反対に平城京の中心部・大極殿だいごくでん辺りから東を見れば、春日の山を背景に興福寺の堂塔がひときわ目を引く存在であったと思われれます。

私は、今でもよく興福寺から平城宮跡まで歩きます。直線距離で約三・五キロメートル、歩くと約四キロで、時間にして四五分くらいでしょう。実際に歩いてみると、第一にその近さを実感します。そして、いつも「双方向の眺望性」に感動しています。興福寺からは平城京跡が、平城京跡からは興福寺の堂塔が、昭和三〇年代くらいまで本当にスカッと見えました。今では背の高いビルが立ち並ぶためスカッととはいきませんが、それでも歩いたびに、不比等はこの「双方向の眺望」を意図的に計画したに違いないと確信すると同時に、当時の風や景色を想像しては天平の夢に遊んでいる次第です。

不比等の思いが詰まった「(中)金堂」

平城遷都から間もなく、興福寺の伽藍が造営されました。不比等が最初につくった

のが「(中)金堂」で、和銅七年(七一四)頃に完成したと考えられています。本尊は、父・鎌足の発願にならって釈迦三尊像が安置されました。

金堂とは、仏教寺院において本尊像を安置するためにつくられる堂のこと。伽藍を

形成する中心的建造物で、仏殿や本堂とも呼ばれます。奈良時代には一寺院で複数の金堂を併置した例も見られました。興福寺でもちに東金堂と西金堂さいこんが建立され、三つの金堂が並び立つことになったことから、中心に立つそもそもの金堂が「中金堂」と呼ばれるようになりました。

中金堂の規模は、それまでの寺院建築の中で最大で、正面三七メートル、側面二三メートル、高さ二〇メートル。平面の大きさ、つまり床面積が平城京

図版

「春日社寺曼荼羅
図」の一部
宝永五年(二七〇八)
作成。中世以来の
伽藍の様子を伝える
貴重な史料

の第一次大極殿正殿とほぼ一緒であることから、不比等にとっては平城京の造営と興福寺の造営が一対の計画であったことがうかがえます。中金堂の前には「中金堂院」と呼ばれる広大な前庭が広がり、各種の法会が行なわれました。不比等はこの中金堂の創建をもって、新時代の仏教文化を切り拓こうとしたのでしょう。

養老四年（七二〇）に不比等が亡くなると、その一周忌に、妻の橘三千代が（中）金堂の須弥壇しゆみだんの西側に弥勒浄土みろくの群像を発願し、夫を供養しました。これにより中金堂には鎌足と不比等ゆかりの仏像が並ぶこととなります。

また同年、元明太上げんめい天皇と元正げんしょう天皇は不比等の菩提のために「北円堂ほくえんどう」を建立し、弥勒如来が本尊として安置されました。これは不比等が生前に弥勒信仰をもっていたからだと伝えられますが、それにしても天皇家が一族のために堂宇を建立するのは異例のこと。不比等がいかに絶大な影響力をもっていたかがうかがえます。

その後、神亀三年（七二六）に聖武天皇が元正太上皇后の病気の回復を願って薬師三尊像を本尊とする「東金堂」を建立し、さらに天平二年（七三〇）には光明皇后が「五重塔」を創建。これら二つの堂塔が立つ中金堂の東側は、聖武天皇と光明皇后が発願

した区画として整備され、築地塀と回廊で囲んで「東院仏殿院」と称されました。

一方、中金堂の西側には、天平六年（七三四）、光明皇后が前年に亡くなった母・橘三千代の一周忌供養として「西金堂」と本尊の釈迦三尊像を発願。また、弘仁四年（八一三）、藤原冬嗣が前年に逝去した父・内麻呂の菩提のために、西金堂の南側に八角円堂の「南円堂」を建立。こうして中金堂の西側エリアは藤原一族の菩提を祈る聖所となったのでした。

平城遷都とほぼ同時に始まった興福寺の造営は、この南円堂建立をもつて全容が整ったこととなります。同時に優れた仏教美術が育まれ、奈良時代には南都四大寺、平安時代には七大寺の一つに数えられ、手厚く保護されました。

こうした興福寺伽藍の周辺には多くの子院（付属寺院）が建てられ、最盛期には一七〇余宇に上りました。なかでも天禄元年（九七〇）に定昭が創立した「一乗院」と、寛治元年（一〇八七）に隆禪が創立した「大乘院」は、皇族・摂関家の子弟が入寺する門跡寺院として栄えたのです。

度重なる焼失と再建の果てに

振り返れば、興福寺の歴史は、度重なる大火や平重衛たいらのしげひらの南都焼き討ちによる焼失と再建の歴史でもありました。特に深刻なダメージを受けること九回。中金堂も七回も焼失しました。

その事例を挙げると、次のようになります。

平安時代

- ① 永承元年（一〇四六）の大火
中金堂・講堂・東金堂・西金堂・南円堂・鐘楼・経蔵・南大門・僧坊など（北円堂と蔵を除く伽藍の大半）を焼失
- ② 康平三年（一〇六〇）の大火
中金堂・東西回廊・中門・南大門・維摩堂・三面僧坊などを焼失
- ③ 嘉保三年（一〇九六）の大火
中金堂・東西回廊・中門・南大門・鐘楼・経蔵・僧坊などを焼失
- ④ 治承四年（一一八〇）の平重衛による南都焼き討ち
中金堂をはじめ、ほぼすべての堂宇を焼失

鎌倉時代

⑤ 建治三年（一二七七）の大火
中金堂・講堂・中門・南大門・三面僧坊などを焼失

⑥ 嘉暦二年（一二二七）の大火
中金堂・講堂・西金堂・南円堂・中門・南大門などを焼失

南北朝時代

⑦ 文和五年（一三五六）の大火
五重塔・東金堂焼失

室町時代

⑧ 応永一八年（一四一一）の大火
五重塔・東金堂・大湯屋焼失

江戸時代

⑨ 享保二年（一七一七）の大火
中金堂・講堂・東西回廊・中門・南大門・西金堂・南円堂・三面

僧坊焼失

このように繰り返し、伽藍を焼失してきましたが、その後の復興・再建はほぼ順調に進められました。興福寺のように国、あるいはそれに準ずる寺院の復興には、創建者たる藤原氏はもちろん、時の朝廷や幕府から相応の支援が得られたからです。

そして興福寺の場合、堂宇の再建造営の際には、平面寸法は従前のものを厳密に踏

襲するなど、いつの時代も「天平への回帰」というテーマが固く守られてきました。

ところが、最後の大火となる享保二年（一七二七）に焼失した伽藍の復興は、ほとんど進捗しませんでした。この大火で、興福寺は大打撃を受けています。講堂に入った盗賊が灯りに用いた火が燃え移り、火元の講堂はもとより、中金堂、中門、東西回廊、三面僧坊、南大門、西金堂、南円堂が焼失。つまり、伽藍の中央から西半分を失ってしまったのです。

すぐに再建計画が立てられましたが、コトは思うように進みません。時の將軍・徳川吉宗からは、「徳川家が興福寺を造立した前例はない。また、興福寺には毎年修理料として一〇〇〇石あまりを与えているのだから、それでまかなうように」とすげなく援助を断られ、なんとか三〇〇〇両の寄付金と募金活動の許可を得るにとどまりました。

この時期は運悪く、幕府が政策的に寺院の復興に関心を示さなくなっており、幕府の財政も逼迫、興福寺も経済的に苦しい時期にありました。藤原一族も地位と名譽はあるけれど、資金力と権力はすでに失いつつあったのです。このような厳しい状況の中で、興福寺は宝物を江戸や大坂に出開帳するなどして、資金調達に奔走します。

焼失から二四年後、唯一、西国三十三所観音霊場の一つであった南円堂だけが復興造営の機運に恵まれ、寛保元年（一七四一）に立柱りつちゆうします。しかし、普請ふしんは何度も中断を余儀なくされ、さらに五五年後の寛政九年（一七九七）に入仏供養。八〇年もの月日をかけて、ようやく日本最大の円堂建築として再建されました。

これ以降、興福寺は、この南円堂信仰を中心に据えて寺院の運営に当たりました。要するに、南円堂が「本堂」の格で、内外の篤信を受けてきたわけです。

一方、本来の中核施設である中金堂は、焼失から一〇二年後の文政二年（一八一九）に、町家の人々の寄進によって上棟されました。しかし、これは規模を大幅に縮小して建てられた、いわば仮設堂宇でした。屋根瓦の質も悪く、のちに雨漏りにも悩まされることとなります。要するに、規模、質ともに「中金堂」ともいえないものでしたし、さらにこの仮設堂宇は、丹塗りの色が他の堂宇と比べて鮮やかだったため、「赤堂」などとも呼ばれていました。その呼称は、ある種の賤称であったと思います。

また、講堂・東西回廊・中門・南大門・西金堂などの再建復興もありませんでした。こうして興福寺は、本来の伽藍とは似ても似つかぬ姿のまま、明治という新たな時代を迎えることになったのです。

「公園の中のお寺」に変貌

ここで、当山境内が森のようになったいきさつについて、簡単に説明しておきましょう。

明治元年（一八六八）、新政府は「王政復古」「祭政一致」の理想実現のため、神仏習合（神仏混淆こんぶこう）を禁じ、神仏分離令を発しました。神と仏を切り離し、神社を優遇して寺院を排斥するというもので、明治初期には廃仏毀釈はいぶつきしやくの嵐が吹き荒れました。ほぼ一〇〇〇年もの間、日本文化そのものであった神仏習合思想が、十分な議論も経ずに、打ち捨てられたのです。

これにより、日本人の宗教観は著しく損なわれました。もともと神道は、この世に存在するものすべてに価値があるという教えですし、仏教には衆生しゆじやうという言葉があるように、命あるものすべてを大事にしていましようという考え方です。ですから、神道と仏教が結びつくのは非常に自然な流れでした。お正月には氏神様を詣で、お盆には氏寺やお墓を参るといふ習慣は、ずっと昔から続けられてきたのです。それを制

度的に明確に分けなさいというのですから、一般の皆さんもたいへんに混乱したわけ
です。

また、各地の寺院も著しく荒廃しました。藤原氏の氏寺である興福寺は、藤原氏の
氏神を祀る春日大社と一体化した大組織であったため、とりわけ混乱をきたしました。

当時の春日社興福寺の境内は、興福寺の地所にたくさんのお社がありましたが、春
日の地所にもさまざまな仏施設が点在するなど、渾然一体としておりました。それ
を形の上でもすっきり分けよとのことでしたから、興福寺にあったお社は全部解体し
て春日に運び、そして春日にあった仏施設は壊されたり興福寺に移されたりしたわ
けです。たとえば、春日には興福寺の寺僧が参籠する参籠所がいくつもあったのです
が、それらはことごとく潰されました。寺僧はこぞって還俗し、多くは新たに神司の
称号を賜って春日神社への神勤めの身となりました。

明治四年（一八七二）に寺領が没収されると、興福寺は大幅に縮小され、荒廃の度を
進めました。鎌倉時代から残っていた食堂や細殿などの建築は撤去され、五重塔や三
重塔も売却の危機に見舞われました。中金堂（赤堂）は改造され、県の庁舎や警察署、

群役所として使用された時期もありました。

この頃、興福寺は「無住」の状態だったといわれます。無住とは、誰もいないのではなく、無住持の意味。要するに責任者不在の状態です。責任者がいないのですから、国宝をはじめとする貴重な文化財の保護もままなりません。こうしたなか、伽藍堂塔の仏像は幸いにもあまり被害を受けませんでした。子院群の仏像や経典の多くが流出し、または焼き払われるなどの被害を受けました。

そして、寺の境内地は、その大部分を公園として利用する施策が採られ、明治一三年（一八八〇）の太政官布達（だじゆうかんふたつ）により、春日野とともに奈良公園となりました。

公園化を進めるために境内に次々に植樹がなされ、おまけに寺域と俗世間とを遮断していた築地塀（大垣）も取り壊されてしまっていたために境界もあいまいで、公園の中のお寺といった様相になっていきました。同二二年（一八八九）には、奈良公園に東大寺や氷室神社などの境内も編入され、その規模はさらに拡張されていきます。この当時の様子は、同二八年（一八九五）に奈良を訪れた正岡子規の句に、「秋風や 囲いもなしに 興福寺」と詠まれています。

ちなみに、当時は社寺境内地の公園利用が広く全国で推進されました。たとえば東

明治五年（一八七二）撮影の興福寺北円堂。寺領が没収され、荒廃が進む様子がうかがえる

図版

京の上野恩賜公園も、もともとは寛永寺の境内敷地でしたし、京都の円山公園は長楽寺を中心に、八坂神社（当時は祇園ぎおん感神院かんしんいん）や円山安養寺、雙林寺そうりんじの境内の一部を召し上げて造成されたものです。

もちろん、この間に興福寺復興の動きもありました。明治一四年（一八八二）には、旧興福寺関係者の連署で内務省に提出していた再興願が認可され、翌一五年（一八八三）には管理権が興福寺に返還されました。しかし、「地所については公園のまま据え置くから、その旨心得るよう」との通告があり、公園化がやむことはありませんでした。

その後、徐々に行政レベルでの古社寺

保存の機運が高まり、同二年（一八八八）に還仏会が執り行なわれ、同三五年（一九〇二）には五重塔の、同四三年（一九一〇）には三重塔の保存修理なども行なわれました。しかしこれらは「とりあえず」というレベルのもので、むしろ一般的には「公園の中のお寺」という認識が次第に定着していきました。

私は、昭和二二年（一九四七）に興福寺で生まれました。物心がついた頃といえば、昭和三〇年（一九五五）前後でしょうか。その頃の日本には今ののように娯楽が多くありませんでしたから、厳しい冬を乗り越え、春を迎えて桜が咲くと、たくさんの人々がどっとお花見に繰り出しました。

興福寺の境内にも桜の木が多く植樹されていましたので、中金堂（赤堂）の前庭や境内のあちらこちらに花見客があふれ、毎日のように宴会が開かれました。今のようなブルーシートではなく、おのおの新聞紙を敷いて、折詰弁当などを開いて酒宴を開くのです。百歩譲ってそれはいいとしても、しかしゴミを持ち帰る人はほぼ皆無でした。新聞紙も折詰の箱も、酒瓶もほったらかしのまま。それをシカがあさって、ゴミはいよいよ散乱し、悪臭が漂う……。夜間に雨など降ろうものなら、翌朝は目もあて

られません。

そうした状況は、少年だった私の目にも「無残」に映りました。強烈な印象として残っており、正直に申し上げれば、子ども心にとても傷つきました。そのときの思いが、私が境内整備と中金堂の再建を志すベースになっているのかもしれない。

よく、「この頃の日本人は……」などと嘆かれますが、私に言わせれば、「あの頃の日本人は本当にマナーが悪かった」ということになります。今は、多くのお人がゴミは持ち帰りますし、公共心があって誠にけっこうなことだと感じています。

少年時代から僧侶になるまで

子ども時代の話が出たついでに、私が僧侶になるいきさつを少しお話ししましょう。お寺に生まれますと、ほぼ自動的に僧侶になるための儀式である「得度」^{とくど}を受けることになります。私の場合は小学校五年生のときに、父である先々代貫首・多川乗俊の下で得度を受けました。ちょうどその年に父が新しいお弟子さんをとったので、二人一緒に儀式を行なえば都合がいくらいのことです。父には私を僧侶にするつもりは

なかったのではないかと思えます。

私は三男でもありましたし、子ども時代は実に自由に自由に過ごさせてもらいました。学校から帰るとかばんを置いて、どこへでもふらふらと出かけては暗くなるまで遊んでいるような子どもでした。どこまで遠くへ出かけても、視線を上げれば五重塔の先端が見えるので、迷子になることはありません。五重塔を目指して歩きながら、お寺に生まれると便利なこともあるなと思った記憶があります。

そんな様子でしたから、私自身も僧侶になる気持ちはありませんでした。実を言うと、写真家になりたいと思っていて、高校卒業後は写真の専門学校なり、大学の写真学科のようなところに進むつもりでおいりました。

ところが、いざその段になると、父が「だめだ」と言う。あまりに意外なことで、私としてもすぐには納得できず、家族会議は大もめにもめました。結局、高校の担任の先生からいただいた「今すぐ人生を決める必要はないのではないか。普通の大学に進んで、四年かけてじっくり考えてはどうか」とのアドバイスに従い、立命館大学に入学して心理学を専攻することにしました。

思えば、この頃の父は、指定文化財の保全修理に明け暮れていました。当時の境内の有り様については、私が心を痛めたくらいですから、父は切羽詰まった心持ちだったのではないのでしょうか。結論から申しますと、「中興の祖」と称される足跡を残しました。

父は、昭和二九年（一九五四）に貫首に就任すると、すぐさま文化財収蔵庫の建設を掲げ、昭和三四年（一九五九）に竣工、「宝物館（現・国宝館）」として開館しました。名宝・阿修羅像をはじめ、興福寺が世界に誇る仏教美術品を収蔵・保管しながら一般参観に供する施設で、寺社におけるこうした施設の建設は戦後の日本で初めての試みでした。建設場所は、細殿と食堂の跡地。これらの地下遺構を、天平の外観を復原した耐火式鉄筋コンクリート造の上部構造が保護する形で立っています。

その後、昭和三七年（一九六二）には大湯屋を、昭和四〇年（一九六五）には北円堂を解体・修理しています。私の大学進学問題はちょうどこの頃でしたから、まだまだ修理・改修しなくてはならない文化財は多く、その事業を引き継ぐ後進は何人いてもいいと考えたのかもしれない。

父はさらに、菩提院大御堂の改築、三重塔の修理なども行ないました。また、先に

も紹介しましたが、中金堂（赤堂）の老朽化に伴い、昭和四九年（一九七四）に仮金堂を建てました。これには興味深い話があります。

実は、仮金堂の建物は、当山とともに法相宗の大本山である薬師寺の旧金堂を移築したものです。赤堂の雨漏りがひどくなって困り果てていた頃、ちょうど薬師寺管主に就任された高田好胤こういんさん（故人）が金堂復興を発願されました。そこで父が、高田管主の師匠である橋本凝胤ぎょういん長老（故人）に、「これまで使っていた旧金堂の建物はどこかに転用するのですか」とお尋ねすると、「いや、しない。解体する」とのこと。赤堂の悲惨な状況を説明し、譲っていただけないかとお願いますと、ありがたいことに「そんならあげましょ」と快諾いただいたのでした。

父が貫首として活動し始めたのは、昭和二〇年（一九四五）の終戦後、社会が激変した時代に当たります。興福寺を維持管理する原資も紙切れ同然となり、長きにわたるご支援をいただいた護持団体「興福会」に名を連ねる人々も往年の勢いはありません。そうした時期に数々の事業を行なった父の労苦は、察するに余りありません。宝物館の建設も銀行に多額の借金をして実現したもので、その返済に長い月日がかかったと聞きました。

さて、話を大学に戻しましょう。私が専攻した心理学は、なかなか興味深い学問でした。ただ、徐々に学生運動が激しくなり、キャンパスは騒然として、授業もままなりません。そこで、臨床心理学研究会というサークルに参加し、誰でも使える共同研究室に入り浸って勉強していました。非行少年の性格形成をテーマに、児童相談所に赴いて事例を集めるなどのフィールドワークも行ないました。

そんなとき、共同研究室の本棚に、古く汚れた『唯識ゆいしき心理学』という本を見つけました。引かれるように手に取ってみると、唯識心理学という新しいネーミングではあるけれど、その中身は興福寺の宗派である法相宗の、まさに伝統的な唯識学の解説本だったのです。

「仏教は古くさいものではないのだな。むしろ唯識は非常に現代的な考え方だ——この本を読んだのをきっかけに、私はこのように思い至りました。そして、卒業後に改めて父に弟子入りすることを決めたのです。

父も内心ではうれしかったと思うのですが、そこは明治生まれの人ですから、喜ん

だような顔は見せません。それどころか、何かを教えることもしてくれません。「見て覚えろ」「失敗しながら身につけろ」ということだろうと思うのですが、これには本当に困りました。

たとえば、夜の法要などは、見よう見まねで動こうとしても、暗くてよく見えません。左に動いては誰かとぶつかって怒られ、右に動いては柱にぶつかって痛い思いをし……そんなことの繰り返しでした。

僧侶にはいくつかの修行段階がありますが、初歩の修行に約一〇〇日間かけて行なう「四度しど加行けぎょう」があります。実はこれは真言宗（密教）の行なのですが、興福寺には鎌倉時代から真言宗の教えが一部入っており、新米僧侶は必ず経験することになります。

私は、父の知人であった西大寺さいだいじの長老・松本實道じつどうさんのご自坊、生駒の寶山寺ほうざんじにご厄介になってこの行を修めさせていただきました。ですから、僧侶としての考え方や作法などの基本は、ほとんど松本さんから教えていただいた。そういう意味で私には、父と松本さん、二人の師匠がいることになります。

四度加行に参加している頃に母が病を得、入退院を繰り返すようになりましたので、興福寺に戻った私が「おさんどん」担当となりました。その頃の愛読書は『主婦の友』（二〇〇八年休刊）。料理のページを参考に、自分なりに工夫をして毎日の食事を用意したものです。

母は、数え七〇歳で亡くなりました。私が二八歳のときでした。自分を産んでくれた人の死には、独特のインパクトがあるものです。それ以降、私は「人生七〇年」と思い定め、何をするにも「七〇歳まで」を念頭に計算しておりました。しかし、ふと気づけばすでに七〇歳を超え、まだまだやるべきことは多く、どうしたものかと少々困っております。

なお、父は昭和五九年（一九八四）、八〇歳で他界しました。その五年後に、私が貫首に就任することになったのです。

コラム① 興福寺を去った仏像・残った仏像

ここに一枚の古い写真があります（左下参照）。これは、これから寺を離れる仏像のための記念写真です。当山にとっては、誠につらく悲しい別れでした。

明治初期、神仏分離令による廃仏毀釈で、多くの堂宇や仏像、文化財が破壊され、失われました。興福寺も明治三年（一八七〇）の太政官布告によって寺域の大部分を失い、一時は無住状態となるなど、悲惨な運命をたどりました。

さすがに危機感を覚えた政府は、明治一〇年代になると古文化財の調査に乗り出し、明治三〇年（一八九八）には古社寺保存法が定められました。それまでに受けたダメージは取り戻しようもありません。

当山でも、その運営・維持費や徒弟教育基金設

置のため、破損仏の一部を益田鈍翁（三井財閥を支えた実業家・益田孝の号）に譲渡することになりました。左の写真は、それらを撮影したものです。



譲与された破損仏

益田鈍翁は文化財保護に熱心なことで知られ、破損仏の四散を防ぐために寄進くださったわけですが、その後長い月日を経るうちに、残念ながら海外に流出した仏像もありました。

たとえば、写真前列中央の快慶作・弥勒菩薩像は米ボストン美術館に、その左右の梵天像と帝釈天像はサンフランシスコ・アジア美術館に、それぞれ修復されて収蔵されています。

この写真を見るたびに、かつては日本最大規模の寺院として栄華を誇った当山の、つらく厳しい時代を思い起こさずにいられません。

一方で、奇跡的に当山に残った仏像もあります。その代表が、天平草創期の姿を今に伝える八部衆像（八体）と十大弟子像（現在は六体）、華原磐一基などで、この中に有名な阿修羅像も含まれています。

興福寺は罹災の多い寺で、これらが安置されて

いた西金堂も四回焼失しています。しかし、そのたびに救出されました。

これらの像は、奈良時代にしか見られない脱活乾漆という特殊な技法でつくられています。粘土の型の上に麻布を漆で固め、中の土を取り去って、張り子状になった内部に心木と木柵を入れて補強するというもので、中は空洞となっています。

つまり、像が軽かったことが幸いました。僧侶たちが仏像を抱きかかえ、燃え盛る火の中から必死で救出する姿が目につかびます。

しかし、返す返すも惜しいことに、明治時代の廃仏毀釈の嵐の中で、十大弟子のうちの四体は損傷を受けて寺を離れました。八部衆のうちの五部浄像も胸から下を失いました（右腕は、東京国立博物館蔵）。

こうした波乱の歴史を経て当山に残るこれらの仏像は、まさに「寺宝」と呼ぶにふさわしいと思っております。

蘇る天平の夢 興福寺中金堂再建まで。25年の歩み
多川俊映・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定 価：1,600 円（本体）＋税

発売日：2018 年 10 月 18 日

ISBN：978-4-7976-7362-3 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)